

——観光を軸に地域活性化に取り
組む場合、時間やお金に余裕があ
るシニア層を呼び込むことが鍵に
なると思いますが、そうした人を
対象にしたプログラムづくりを続
けてこられた立場から見てどうお
考えですか。

大社 確かにアクティブシニアと
呼ばれる年代の人は、よく旅行に
出掛けます。どうせ行くなら、海

外よりも国内でお金を使ってくれ
た方が地域活性化につながるわけ
ですが、その場合、シニアにとって
魅力ある企画を提案していくこと
が課題です。同時に、訪れた人の
消費が地域振興につながる「仕組
み」をつくることも大事でしょう。

数年前、団塊世代の一斉リタイ
アに合わせて、その世代をターゲット
にしたツアーが数多く組まれま
した。ですが結果的には、期待さ
れたほど旅行消費は伸びませんで
した。また、ツアーに参加したシ
ニアにとっても、本当に満足でき
るものだったかどうかは疑問です。

シニア向けに大ヒットしたツアー
というのも見当たりませんでした
ね。

——グローバルキャンパスが提供
しているプログラムというのは、
どんな内容ですか。

大社 1975年に米国ニューハ
ンプシャー州内の5つの大学で始
まったElderhostel（エルダーホス
テル）を起源に、25年ほど前から
「旅と学びと出会い」をコンセプト

にした生涯学習プログラムを企画・
運営しています。日本の大学には
寮がなく、プログラムをつくる専
門家もいないので、アメリカのよ
うには普及しませんでした。そこ
で大学ではなく地域をベースに、
その地の歴史や文化、自然環境な
どをテーマとして学ぶ滞在型プロ
グラムを地元の人とともにつくる
ようになりました。今でいうところ
の着地型の旅行企画の一種です。
1回の参加者は20人前後ですが、
70代前半の方々を中心に、これま
でに延べ1万人以上が参加されま
した。生涯学習がコンセプトです
から「シニアのエンパワーメント」
をミッションとしています。

——着地型というのは、旅の出発
地であるマーケット側の旅行会社
が企画するパッケージツアーとは
少し異なり、旅先の到着地（着地）
の人たちが主導的な役割を果たし
てつくる旅のスタイルですね？

大社 伝統文化や自然などの地
域資源を掘り起こし、それらを観
光資源として編集し直して地域の

活性化につなげていく新しい旅づ
くりのスタイルといえるでしょう。
これまでの旅と違うのは「旅づく
りも来訪者の受け入れも地域の人
が主役」という点です。また、従
来の団体旅行のスタイルでは来訪
者と住民との間に大きな壁があり
ました。観光地に住んでいる人は
「行楽シーズンになると渋滞がひど
くなるし排気ガスは出る、ゴミが
大量に捨てられていく」といった
観光に対するマイナスイメージを

地域とシニア旅行者が 元気になるツアーを

シニアを地域に呼び込み 交流によって活性化を図る

地域が持つ魅力を生かした新し
い旅を創出することで、地域振興
を図ろうとする動きが盛んになっ
ている。旅行者に占める中高年の
割合は高いだけに、その呼び込み
による交流人口の拡大がポイント
になる。学習意欲が高いシニア層
を対象に、地元と一緒に学びと体
験の滞在型プログラムを企画・提
供しているNPO法人グローバル
キャンパス理事長の大社充さんに
聞いた。



大社 充（おおこそ・みつる）

NPO法人グローバルキャンパス理事長
観光地域づくりプラットフォーム推進機構代
表理事／（社）日本観光振興協会理事
昭和36年生まれ。京都大学在学中はアメリ
カンフットボール部で活躍し、全日本選手権
「ライスボウル」における京大初の全国制覇
に貢献、年間最優秀選手賞チャック・ミルズ
杯を受賞。卒業後は（財）松下政経塾に入
塾し、「高齢化社会と生涯学習」をテーマに
研究。62年にエルダーホステル協会創設に
参画後、集客交流プログラムの開発とともに
観光まちづくりや人材育成に取り組む。国土
交通省「成長戦略会議」委員（平成21年
～22年）ほか



グローバルキャンパス理事長

大社 充

特集 地域活性化の鍵 ～シニアの動向に注目～

今や地域活性化に欠かせないのが、旅行者のニーズを捉えた観光の創出だ。
シニア消費が100兆円を超えたとされる今、その世代の旅行消費を少しでも
地域振興に生かしたい。今号はそんな各地の取り組みを追ってみた。

取材・清水 高
笠井尚紀
山田清志
関根利子

写真提供：wdeon / Shutterstock.com